
フジテレビ『超逆境クイズバトル！！99人の壁』 解答権のないエキストラ補充に関する意見

放送倫理検証委員会

委員長	神田 安積
委員長代行	岸本 葉子
委員長代行	升味佐江子
委員	大石 裕
委員	高田 昌幸
委員	長嶋 甲兵
委員	中野 剛
委員	西土彰一郎
委員	巻 美矢紀
委員	米倉 律

目次

I	はじめに	1
II	審議の対象とした番組	2
III	委員会の調査	3
1	企画コンペでの優勝から特番へ	3
2	解答権のないエキストラ補充の始まり	4
3	レギュラー化で制作体制が破綻	4
4	補充の常態化と情報の非共有	6
5	時を要したルール変更	7
IV	委員会の考察	8
1	「類のない」企画への固執	8
2	全社的な期待の重圧	9
3	実質的なリーダーの不在	9
4	有効に機能しなかった人員配置	10
V	委員会の判断	11
VI	おわりに	11

I はじめに

「総勢100人で賞金をかけて争うこの前代未聞の戦い」「自ら指定した得意ジャンルのクイズに5問正解で賞金100万円。超逆境クイズバトル99人の壁、いよいよスタートです」。2018年10月20日、フジテレビ『超逆境クイズバトル！！99人の壁』のレギュラー放送第1回は勢いあふれるナレーションで始まった。MCが登場するのは、スタジオ中央に設けられた格闘技のリングをほうふつさせる四角いステージ。ステージの四方を階段状の解答席が、そそり立つ壁のように取り囲む。解答席にはウシ、からあげ、編み物などそれぞれの得意ジャンルを示す小パネルが立てられ、小学生らしき子どもを含むさまざまな年代の人々が、MCの呼びかけに応じて拍手し、歓声を上げる。

クイズ番組の多くが芸能人や有名大学など特定の属性を持つ人を解答者とする中で、これほど多様な一般視聴者の参加、100人で早押しをするという規模は類を見ず、2017年12月31日に単発番組として放送されたときから話題を呼んだ。2018年8月15日放送の特番第3回は、放送批評懇談会のギャラクシー賞月間賞を受賞し、「秀逸なシステム」と評価されている。

注目と期待を集めて始まったこの番組に関し、2020年2月13日、BPOへ1件の意見が寄せられた。番組にエキストラとして複数回参加したという匿名の人から、数合わせのための出演なので解答権はないと収録前にスタッフに言われた、1対99の対決をうたいながら視聴者を欺いているのではないかという内容だ。BPOから連絡を受け、フジテレビが直ちに調査をしたところ、2018年8月15日放送の特番の第3回で台風により生じた欠員を補充したのが最初で、その後レギュラー第1回から2019年10月26日放送の第25回まですべての回で解答権のないエキストラの補充があったことが判明する。2020年4月3日、フジテレビは番組のホームページに「お詫び」を掲載、「番組が標榜している『1人対99人』というコンセプトを逸脱していた」「視聴者の信頼を損なう形となっていた」としている。

BPO放送倫理検証委員会（以下「委員会」という）は、フジテレビからの報告書と番組の映像などをもとに5月の委員会で検討した。委員からは「意欲的な番組であるが、もともと無理があったのではないか」「同局のバラエティー番組『ほこ×たて』に対して委員会が2014年4月に出した意見書（委員会決定第20号）において指摘した背景や問題点との類似がうかがわれる。なぜ教訓が生かされなかったのか、再発防止策が生かされていたのかについて解明する必要がある」などの意見が出た。標榜するコンセプトと実態が違っていたことは放送倫理違反の疑いがあり、制作過程を検証する必要があるとして、レギュラー放送第1回から第25回（以下「本件番組」という）を対象に審議入りを決めた。

II 審議の対象とした番組

『超逆境クイズバトル!!99人の壁』はクイズバラエティー番組である。2017年12月31日に単発番組として放送され、その後第3回まで制作・放送された特番が、本件番組の前身に当たる。特番第3回を制作中の2018年6月にレギュラー化が決定した。

レギュラー化後は2018年10月20日から隔週の土曜、午後7時からの枠で放送されてきた。制作は編成制作局第二制作室、2020年4月時点の制作体制は制作統括1人、チーフプロデューサー1人、プロデューサー8人、アカウントプロデューサー1人、総合演出1人を含む計50人となっている。

本件番組のルールは以下のとおりだ。

- ① 解答者は、四方に25人ずつ着席する計100人である。
- ② 100人の中から最初に1人、くじ引きで選ばれた人が「チャレンジャー」となり、ステージに出る。
- ③ 残る99人が「ブロッカー」となり、「チャレンジャー」が正解するのを阻止する。
- ④ クイズは「チャレンジャー」の得意ジャンルから出題される。得意ジャンルは100人それぞれ異なっており、「100人100ジャンル」のクイズが用意される。例えば、サメを得意ジャンルとする「チャレンジャー」なら、サメに関するクイズが5問出される。
- ⑤ 1問目は25人と早押しを競う。
- ⑥ 2問目は50人、3問目は75人と、戦う相手が増えていく。
- ⑦ 4問目、5問目は99人と戦い、5問連続で正解すれば、賞金100万円を獲得する。
- ⑧ 「ブロッカー」の誰かが「チャレンジャー」より先に正解したら、正解した人が交代に「チャレンジャー」となり、ステージへ出る。このルールをスタッフは「ローテーション制」と呼んでいた。
- ⑨ 交代に伴い出題ジャンルも、「ブロッカー」から新たな「チャレンジャー」となった人の得意ジャンルに変わり、⑤以下の戦いが繰り返される。

「ローテーション制」にのっとって100人の誰もが「チャレンジャー」になり得て、その100人が各人各様の得意ジャンルを引っ提げて参加するため、クイズは100のジャンルから出題される可能性があるわけだ。

1対100を掲げるクイズ番組は海外にもあるが、この「ローテーション制」と「100人100ジャンル」が本件番組の最大の特徴といえる。

Ⅲ 委員会の調査

本件番組では、1人対99人をタイトルにうたいながら、解答席に着いていた100人のうち、解答権のないエキストラが、最も少ない回で3人、最も多い回で28人含まれていた。解答権のないエキストラの総数は、全回で延べ406人に及ぶ。

委員会は、番組の標ぼうするコンセプトと実態の違う状態が25回の全回、期間にして1年間にわたり続いた背景を検証すべく、企画に合った制作体制がとられていたかどうか、企画の検討状況はどうであったかを中心に、聴き取りを行った。

聴き取りは、本件番組とその前身である特番に関わった総合演出、チーフアシスタントディレクター、プロデューサー、チーフプロデューサー、制作統括、制作センターおよび第二制作室の幹部、計10人に対面で行い、約12時間に及んだ。うちチーフアシスタントディレクターは制作会社から派遣されており、他の9人はフジテレビの社員である。

1 企画コンペでの優勝から特番へ

本件番組の元となった企画は、2017年9月に開催された「第1回企画プレゼン大会」の優勝作だ。局が浮上するためにバラエティーが頑張らなければという意識の下、企画書を誰に出していいかわからない、出しても返事がないという社員の声を受けて、当時の第二制作室長の発案で開催された。企画を提出できるのは第二制作室の社員である。書類選考で残った8本について、社内のマルチシアターでプレゼンテーションを行い、社内で働く人なら所属を問わず誰でも観覧、投票ができるようにした。3位までに入った企画は、番組を制作して放送することが、編成部門と事前に取り決められていた。投票で1位を獲得した企画の発案者は、当時アシスタントディレクターをしていた入社2年目の社員であった。

優勝作の番組化にあたっては、この2年目の社員をディレクターに抜てきし、実質的な総合演出として制作の中心に据えた。また、社員のプロデューサーと、評価の高い制作会社をつけ、番組作りの経験の少ない総合演出をバックアップする体制をとった。

コンペで優勝した時点では「ローテーション制」も「100人100ジャンル」もなかった。「チャレンジャー」にはオーディションで5、6人を選んでおき、1人ずつが出て、1人対100人のクイズバトルを行う。出題は「チャレンジャー」の得意ジャンルからとする。「チャレンジャー」が対戦するのは「ブロッカー」枠に応募してきた人という形式だった。

その後、プロデューサーも含め打ち合わせを重ねる中、「ブロッカー」が戦う理由は何かという話になる。そのとき、阻止すれば新たな「チャレンジャー」になれるルー

ルとする案が誰からともなく上がり、その方が独自性も出て面白いと、総合演出をはじめ皆が賛同し、「ローテーション制」の採用が決まった。

変更前のルールでは、事前に選んだ5、6人の「チャレンジャー」の得意ジャンルのクイズのみを準備すればよかった。それに対し「ローテーション制」を取り入れた結果、上述のとおり100人の誰にでも「チャレンジャー」になる可能性があるため、「100人100ジャンル」のクイズを準備しなければならなくなる。戦うのは5問だが、予備を含めると8問程度必要で、計約800問に上る。作問の負担が著しく増大することは容易に想定できたが、このとき番組スタッフはクイズ作家を多く投入すれば対応できるとの考えで一致した。

出場者の募集は番組のホームページやツイッターで行い、反応は良好だった。「チャレンジャー」になるとステージでMCとの掛け合いがあることから、キャラクターも重視し、選考はオーディションで行うことにした。特番の第1回、第2回では100人ちょうどを決めておき、予備の出場者は設けておかなかった。オーディションに来た人たちは参加意欲が高く、その人たちを予備として押さえながら当日になって参加できないと告げるのは失礼であるという、総合演出の考えからだ。番組への参加にかかる交通費や出演料は支払われない。特番の2回とも当日の欠員は出なかった。

2 解答権のないエキストラ補充の始まり

特番の第3回も100人ちょうどをそろえていたが、収録日の2018年7月28日は台風の接近が危ぶまれ、当日急な欠員の出た場合に備えてエキストラのスタンバイが必要だという話になり、業者に手配を依頼した。スタジオには解答席と別に観覧席があり、その業者にはもともと観覧席に着く人の手配を依頼している。収録当日の出場者の誘導も同じ業者の担当である。スタジオでリハーサルをまわすチーフアシスタントディレクターへは業者から逐次連絡があり、最終的に4人の出場予定者が来ておらず、同数のエキストラを入れると報告された。

両者が連絡を取り合う中、4人のエキストラを入れるにしてもそのうちの誰かが「チャレンジャー」を阻止した場合、エキストラには得意ジャンルのクイズが準備されていないことに話が及ぶ。エキストラには解答しないよう指示することで、チーフアシスタントディレクターと業者は合意し、業者が指示を行った。

特番の第3回において、100人の中に解答権のないエキストラを入れたことは、あくまで悪天候に伴う緊急対応であったが、その後、100人を集められなかったときに、解答権のないエキストラの補充に制作者たちが依存していく契機となった。

3 レギュラー化で制作体制が破綻

特番第3回の収録に先立つ2018年6月、番組のレギュラー化が決定した。特番

の2回の視聴率は必ずしも振るわず、その数字で土曜のゴールデン枠のレギュラーとなったのは異例だという。編成担当からの提案に、制作者たちは思いもよらぬチャンスを楽しむ反面、不安を抱いた。特番では3カ月の準備期間があったところを、隔週で継続的に制作していいのか、そもそもレギュラー放送に向いている企画かどうかという疑念もあった。チーフプロデューサーが制作統括をはじめ第二制作室の幹部に相談すると、総合演出の意思を尊重しようという話になり、総合演出からはやれるならばやりたいとの意思が示され、編成担当の提案を最終的に受け入れた。

レギュラー化にはコンペでの優勝以上の期待と注目が集まった。広報は総合演出のインタビューをメディアへ積極的に仕掛け、「鳴り物入り」と社内で評された。特番で厚めに配置されていた人員はさらに増強された。総合演出を社員が務める上、制作統括やプロデューサーに社員を6人つけるのは、第二制作室が持つ30以上を数えるレギュラー番組の中でも破格の布陣だったという。

それでもいざ動き出すと、クイズの準備に関する作業が膨大な量に上った。数をそろえるのと裏取りだけで、スタッフを総動員し1カ月で間に合うかどうかの作業となる。プロデューサーたちも、クイズに関する会議が週1回か2回、多いときで3回に上り、裏取りや映像の使用許諾を取るのに忙殺された。クイズの減り方は思いのほか速かった。早々と敗退する「チャレンジャー」が続出し、例えば2問目で敗退すれば、その人の得意ジャンルで準備した残りの6問程度はもう使えず、交代後の「チャレンジャー」の得意ジャンルに次々と変わっていく。

さらなる想定外は、参加の辞退者の多さであり、出場者の確保が最大の課題となった。100人ちょうどをそろえておき急な欠員の出た特番第3回の経験から、レギュラー化後はオーディションの合格者を多めに出し、その中から収録日に来られる人の参加を募る方法に変え、特番に参加した人にも声をかけ、第1回に向けては140人を準備した。

ところが、いざ収録日の都合を聞くと、参加すると答えたのは89人とどまった。スタッフがやり取りした印象では、オーディションは興味で受けてみたもののそこまで本気ではなかった、交通費をかけてまで行くこともない、などと思う人が多いようだったという。連絡そのものが取れない人も少なくなかった。引き続き再交渉や連絡を試みるも出場者が確保できないまま収録日が迫り、チーフアシスタントディレクターと総合演出とプロデューサーが連絡を取り合う中、業者へ依頼するしかないのではという話になり、解答権のないエキストラを最終的に12人補充した。

制作者たちがレギュラー化に当たって抱いた不安と疑念は、現実のものとなった。これらの事態をフジテレビの報告書は「レギュラー化で制作体制が破綻状態に」と表している。

4 補充の常態化と情報の非共有

欠員は第2回では26人、第3回では22人、第4回では9人、第5回では15人と続き、解答権のないエキストラの補充は常態化していった。

補充で対応する以前に、欠員が出ないようにする策を講じなかったわけではない。まずはオーディションの開催回数を増やすことで解決を図ろうとした。首都圏での応募者が減ると、開催地を名古屋、大阪、福岡、仙台へと広げ、スムーズに開催できるよう、プロデューサーは系列局へ協力を依頼した。開催頻度はほぼ毎週末となり、選考に当たる総合演出は、土曜に地方都市でオーディションを行った後、とんぼ返りで日曜のオーディションに臨むこともあったという。それらで十分でない、次の策としてオーディションの合格ラインを変更する対応もした。

にもかかわらず100人の出場者を確保できず、打ち合わせの場にはその時点で集められている人数が常に記され、その場へ出入りする人の誰もが目にすることのできる状況だった。収録の数日前には、その時点での不足人数が業者へのエキストラの発注人数として定まった。それより後に出場者を確保できても、その人の得意ジャンルの作問が間に合わず、業者のエキストラの手配もそれ以上先延ばしできないからだ。解答権のないエキストラの前に立てる得意ジャンルのパネルは、準備してあるものをその人とは無関係に割り振っていたという。業者への発注はプロデューサーたちも了解の上、チーフアシスタントディレクターが窓口を務めた。

プロデューサーたちは、20人台の補充が続くとせめて10人にしなければなどと、懸念や危機感を総合演出に伝えることはあったものの、突っ込んだ議論はしなかった。チーフプロデューサーに相談し、問題を解決するアイデアを求めることもしていない。いくつもの番組を抱えるチーフプロデューサーは会議に出られないことも多く、演出については総合演出と個別に話しているようなので、自分たちは裏方に徹するべきだと考え、プロデューサーたちはクイズの裏取りや許諾取りに引き続き全力で当たっていた。

総合演出の方は、バラエティーの制作経験が豊富で番組の総責任者であるチーフプロデューサーが企画のやり方を今すぐ変えろと言わない以上、解答権のないエキストラの補充はよくないことではあるけれど容認されているのだろうと考えた。

実はここに行き違いがあった。チーフプロデューサーは、エキストラの補充を把握こそしながら、解答権がないことを知らなかった。オーディションと業者からの派遣と、番組への参加に至る経緯は異なるものの、100人に等しく解答権はあり「99人の壁」は成立していると思っていたのだ。プロデューサーたちに対して、エキストラの得意ジャンルのクイズはどうしているのかと尋ねることはしていない。折々に、何か問題はないかと声をかけ、問題はないとの答えだったので、それ以上は聞かなかったという。

エキストラに解答権がないことを知っているのはプロデューサー以下にとどまり、チーフプロデューサーやその上長にあたる制作統括にはその情報が共有されていなかった。

5 時を要したルール変更

チーフプロデューサーはレギュラー化後の早いうちから、企画に限界を感じていた。解答権がないことは知らなかったが、エキストラを入れないと100人に達しない状況を問題だと思っていた。オーディションの繰り返しや合格者への個別連絡、参加すると答えた人の分のクイズの急ピッチな作成などで現場が疲弊しつつあるのも察せられた。

視聴率は思うように伸びず、編成の上部からも、チーフプロデューサーが策を講ずるよう言われていた。チーフプロデューサーは、同じことの繰り返しでは伸びを期待できない、特に作問に取られている膨大なエネルギーを別のことに振り向けるべきだと考え、「ローテーション制」の見直しを総合演出に提案した。

総合演出は、この提案をすぐに受け入れなかった。「ローテーション制」が前提の「100人100ジャンル」という独自性を失えば、番組のてこ入れにより面白くなかったと言われ、既存の視聴者まで離れることを恐れた。チーフプロデューサーは、総合演出の考えが変わるのを待った。第二制作室長自らが発案した初のコンペで優勝、鳴り物入りのレギュラー化、破格の布陣という経緯、第二制作室のみならず社内全体が総合演出を前面に押し出す雰囲気から、この番組については総合演出を立てるべきだと思い、強くは進言しにくかったという。

番組打ち切りの可能性も見える中、視聴率の不振が続く状況とチーフプロデューサーとのいくたびかの話し合いを受けて、総合演出は決断した。レギュラー第1回の放送よりほぼ1年後、2019年11月9日放送の第26回から、「ローテーション制」と「100人100ジャンル」を廃止した。「チャレンジャー」と「ブロッカー」の枠を分け、「チャレンジャー」になる人として事前に6～7人を決めておき、敗退すればその中で交代する。「ブロッカー」が入れ替わりに「チャレンジャー」となることも、また、その人の得意ジャンルのクイズで戦うこともない。「ブロッカー」役は、東大生、教員、鉄道・旅行会社の社員といった、一定の属性を持つ人に声をかける。これらの人々は、解答席に着いてクイズに参加するが、ステージに立ってMCと掛け合いをすることはない。このルール変更により、作問と出場者選考の負担は大幅に減る。

斬新な「ローテーション制」と「100人100ジャンル」であったが、番組のうたう1人対99人のバトルがその二つをかなえて実現したのは特番の2回のみであり、レギュラー化後は企画どおりに制作されたことが結局1度もなかったのだ。番組が標ぼうするコンセプトと違っていた実態が明らかになるのは、ルール変更より後のこと

である。

IV 委員会の考察

委員会は、かつてフジテレビのバラエティー番組『ほこ×たて』の2013年10月20日放送回について放送倫理違反と判断した（2014年4月1日 委員会決定第20号 フジテレビ『ほこ×たて』「ラジコンカー対決」に関する意見）。最強の実力を誇る者同士が「真剣勝負」で対決し、結果をスタジオの出演者が予測する番組だったが、この放送回で問題になったのは、実際には行われなかった対決が編集によって作り上げられていた点にあった。フジテレビはそのときの教訓を踏まえ、放送倫理に関する問題を社内で共有し、意識を高め、制作に生かすことを目的に会合を開催するなど、この種の問題を未然に防ぐための仕組みや体制づくりに努めてきたという。

フジテレビは報告書において、本件番組が「1人対99人」のガチンコのクイズバトルであることを「視聴者との約束」であるとしている。しかし、実態は100人のうちバトルに加われない人がいて、自らが定めた「視聴者との約束」を裏切り、しかも1年の長きにわたり省みられることがなかった。

本件番組は、実際にはなかったものを作り上げたわけではない。しかし、「誰も見たことのない番組」と「無理が生じる危険」が併存する中で、視聴者との約束を裏切るに至った点において、『ほこ×たて』の問題点と通底する。かつての教訓を踏まえた取り組みがなされながら、視聴者との約束に反しているという意識がスタッフの間で十分に共有されるに至らなかったのはなぜだろうか。

1 「類のない」企画への固執

「100人100ジャンル」はコンペで優勝したときの企画にはなく、特番の制作に向けてほかの制作者たちと企画を練り上げていく過程で出たアイデアであり、スタッフ皆がそこに番組の独自性を見いだした。確かに類のない特色であり、特番2回までは企画どおりに制作することができた。その後100人をそろえられなくなったにもかかわらず、番組スタッフの多くは、厳密に1人対99人ではないものの、1人対多数のガチンコのクイズバトルは維持できていると考えようとした。

作り手は独自性が欲しいものなのだと、ある制作者は委員会の聴き取りで語った。特番より短い準備期間で制作する中、番組タイトルが掲げる視聴者との約束と実態が乖離していきながら、スタート時に付与した独自性をなかなか手放すことができず、かたくなに守り続けようとしたと思われる。

100の解答席のすべてにその人の得意ジャンルを示すパネルが設置されていたが、補充されたエキストラの席には、当人とは無関係のパネルが割り当てられていた。い

うなれば99人をめぐる「偽りの看板」の上に「偽りのパネル」が重ねられていたのだ。形骸化した100人で収録を行っているときの不安や心苦しさを、現場をまわしていた若いスタッフは、聴き取りでさまざまに語った。解答権のないエキストラがとっさに早押しボタンを押してしまうと背筋が凍る思いがしたとか、後ろめたさとか、罪悪感という言葉も出た。

それでもとにかく収録を行うために形だけでも「100人100ジャンル」をそろえなければとの焦りでいっぱい、視聴者との約束からして許されないのではという問いに向き合う心理的な余裕は、ほとんどなかったようだ。多くのスタッフは、「100人100ジャンル」の持つインパクトを維持しなければならない、それこそが土曜のゴールデンタイムの番組として存続する道だと思い込んでいたことがうかがえる。

2 全社的な期待の重圧

スタッフの心理的余裕の乏しさは、スタッフ個々人の責めのみには帰すべきものではない。すでに述べたように、社内コンペで1位を獲得したのが入社2年目の若手だったことも、総合演出に抜てきされたことも、画期的だと目されていた。この番組を盛り上げようとする気運は、制作分野にとどまらず、編成や広報にまで及び、まさに「全社を挙げて」というべき様相を呈していた。

レギュラー化が決まると、この番組が成功することで社内に大きな変化が生じるのではという期待がいよいよ高まった。時代にはまる番組作りの試行錯誤が続く中、若手がゴールデンで当てたら流れが変わると皆が思い、そこに賭けるような雰囲気だったと、聴き取りで語った人もいた。期待が重圧に変わっていく過程を端的に表しているのは、フジテレビの報告書に記された番組審議会における「みんなで『成功を期待』したが、それが『成功するべきだ』、『成功しなくてはならない』と変容していった」という社長の発言かもしれない。

もとより放送局において特定の番組に対する別格扱いが、常に問題を生み出すわけではない。新しい挑戦にはそうした手法や措置も有効だろう。けれども本件番組においては、「鳴り物入り」と評された制作を取り巻く環境が、スタッフの心理に影響し、視聴者との約束に反しているのではと立ち止まって考え、話し合う余裕を奪う遠因となってしまった。

3 実質的なリーダーの不在

番組の企画・制作に当たっては、番組全般を把握し、責任を持つリーダーが必要なのは言うまでもない。この役割を担うのはチーフプロデューサーだとフジテレビは説明している。本件番組のチーフプロデューサーは、バラエティの分野で多くの経験を積み、評価の高い社員であった。

だが同時に本件番組では、総合演出の任に当たる若手ディレクターが大きな役割を担っていた。「鳴り物入り」の企画の発案者である総合演出に対して、チーフプロデューサーは番組制作の多くの部分を委ねることになった。それは総合演出に対するチーフプロデューサーの配慮であり、期待感の表れでもあった。

そのことが結果的に、番組を方向付けるリーダーは誰なのかを不明確にしてしまった。例えば総合演出は、解答権のないエキストラの補充について、よくないこととは思いつつ、チーフプロデューサーが今すぐ変えろと言わない以上、容認されるものと受け止め、そのやり方を続けていた。他方チーフプロデューサーには、制作過程を管理するための情報が十分に上がっていなかった。企画の変更に関してもチーフプロデューサーは、早く進めるべきだと思いつつ、社内コンペを勝ち上がってきた経緯からくる遠慮と、頭ごなしに命ずるのは人を育てないという考えもあり、あくまでも提案にとどめ、総合演出が聞き入れるのを待った。

それぞれが、要所要所で相手の判断に決定を委ねてしまい、先頭に立って舵取りをするものがない状態となっていた。

4 有効に機能しなかった人員配置

本件番組に対する局の強い期待は、上述した番組スタッフの「破格の布陣」にも表れている。特に番組のレギュラー化に際しては、様々な分野で経験を積んだスタッフを多数配置するなど、かなり配慮していたことがうかがえる。

しかしレギュラーでの制作がいざ始まると、その体制は有効に機能しなかった。フジテレビ社員の制作統括やプロデューサーが6人配置されたにもかかわらず、むしろ6人配置されたがゆえに、労務管理や予算管理、権利関係のチェック、キャスティングや出演者との向き合いなど、それぞれに割り当てられた業務に自らの役割を限定してしまいがちとなった。聴き取りでは、プロデューサーが多いがため「見合ってしまった」とも表現されている。社内の期待が高まる中、スタッフの何人かは当初から制作上の危うさを認識しながら、その思いを自らの内に押しとどめる雰囲気にあった。

制作の打ち合わせの場には、100人に届いていない出場者の人数が常に記されていた。収録数日前には、補充するエキストラが業者に発注されていた。これらの事実は、欠員がもはや想定外でなく、想定内となっていたことを如実に示している。にもかかわらず、複数いたプロデューサーは、総合演出に対して懸念や危機感を伝えはするものの、問題解決に向けた抜本的な対策や企画の再検討に取り組むことはなかった。

本件番組へのプロデューサーたちの関わり方は、クイズの裏取りや映像の使用許諾の取得など分担の業務を遂行したり、系列局に協力を依頼しオーディションの開催を後押ししたりと、総合演出の企画をいわば一丸となって支えるものであり、例えば辞退率を下げる方法を探るなどといった、総合演出とは別な角度から事態をとらえて助

言する働きをしていなかった。いずれもプロデューサーに期待される役割を十分に果たしていなかったといわざるを得ない。上述した舵取り役の不在に加え、企画や制作を前に進めるアクセル役のスタッフはいながら、広い視野から警鐘を鳴らすブレーキ役のスタッフが不在であったことも、迷いながらの走行を続ける要因の一つとなった。

意欲的なスタッフ配置も、残念ながら有効に機能しなかったといえる。

V 委員会の判断

本件番組は、1人のチャレンジャーが99人の解答者に阻まれながら全問正解を目指すクイズ番組であることを、番組タイトルや番組内のルール説明で、視聴者に対し伝えていた。そこで行われるものは局自らが認めるとおり、「1人対99人」のガチンコのクイズバトルでなければならないはずだ。しかしながら、レギュラー化された第1回から第25回まで1年以上にわたり、欠員の補充として解答権のないエキストラを出場させており、「1人対99人」のガチンコのクイズバトルとはなっていなかった。

このことは、本件番組が標ぼうしている「1人対99人」というコンセプトを信頼した多くの視聴者との約束を裏切るものであった。また、NHKと日本民間放送連盟が1996年に定めた「放送倫理基本綱領」の「放送人は、放送に対する視聴者・国民の信頼を得るために、何者にも侵されない自主的・自律的な姿勢を堅持し、取材・制作の過程を適正に保つことにつとめる」との規定に照らし、制作過程の重要な部分を制作者たちが十分に共有していなかった点において、その過程が適正に保たれていなかったと言うべきである。

よって、委員会は、本件番組には放送倫理違反があったと判断する。

なお、本意見書を待たず、フジテレビは再発防止策の導入を示した。制作体制の再点検のほか、視聴者との約束を考える勉強会の定期的な実施、制作上の問題を誰でも相談できるホットラインの開設などが、報告書に挙げられている。これらの取り組みが実を結び、同様の問題が再発しないことを切に望みたい。

VI おわりに

委員会の聴き取りでは、ベテランの制作者たちから「偽りの看板」となってしまったことを惜しむ声が聞かれた。解答権のないエキストラを補充しなくても作る方法はあった、例えば、90人しか集められなかったなら今回は「90人の壁」だと番組内で言えばよかった、MCのキャラクターならできたはずだ、エキストラを補充するにしてもその人たちに解答権を与え「99人の壁」にする方法はあった、広めのジャンルのクイズを複数準備しておき、エキストラに得意なジャンルを選んでもらえばよか

った、などだ。こうした臨機応変なアイデアや、窮地を面白さへの突破口に変える柔軟性は、制作者たちが築いてきた財産といえる。本件番組では現場のスタッフへ伝えることができなかったが、ぜひ継承してほしい。

委員会は『ほこ×たて』に対する意見書でこう述べた。「『＜矛盾＞を設定しようとしたことがそもそも過ちだった』と言いたいわけではない。そこにあえてチャレンジした“制作者魂”はすばらしいし、だからこそ番組は成功した。ただ残念なことに『このチャレンジの難しさ』に関する認識が甘かったのではないか」。この言葉をいま一度制作者たちへ届けたい。実現不可能に思える企画への挑戦を、本意見書は決して否定しない。むしろその意欲こそ、新しいものを生み出す原動力と考える。必要なのはリスクの十分な検討と、挑戦をバックアップする体制作りだ。それこそは様々な経験を積んできた人たちの腕の見せどころだろう。

2020年3月7日を最後にしばらく放送されていなかった番組は、6月6日に再開した。収録は新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、解答者をスタジオに集める従来の方法では不可能だったが、99人をリモートでつなぎ、最新のアプリを導入することにより、タイムラグもほとんどなく、100人の早押しバトルを実現した。この第31回の「壁」は東大生で、画面には「東大生99人をやっつけろ！！」というスーパーが出ていたが、誰かのリモートが切れるハプニングのたびに「98人」「97人」などと実態を反映した数字に変えていた。

数字を偽っていた過去を視聴者に知られてしまったのが「逆境」なら、大人数が特色の番組にとって一堂に会する収録のできない状況は、さらなる「逆境」であり、この番組のみならず多くの番組が遭遇する未知の事態だ。経験知の蓄積のないことを試み、成立させた。コロナのときはあのように作ったと、後に振り返ることになる。それをヒントに新たな企画が生まれる可能性もある。

偽りの数字がなくなってから収録現場をまわすスタッフはその胸のうちを、ワクワクする、後ろめたくなく番組を作れるのは気持ちがいい、楽しいと聞き取りで語った。若いスタッフの口から「番組作りが楽しい」と聞いたことに希望を感じる。

生産年齢人口の減少と労働市場の流動化の中、若い担い手の不足が放送界でつとに言われる。力のある人材が放送界に夢を抱いて参入してくるように、新しい才能の芽を掘り起こす試みと、伸び伸びと育てる体制の模索を続けてほしい。未来へ渡す財産は、彼らが作り上げていく。